

# 日本語による会話終了のメカニズム解明のための予備的考察

大 浜 るい子

(1997年10月1日受理)

Wie bringt man die Konversation zum Ende?

Ruiko Ohama

Hier wird diskutiert, wie man die Konversation zum Ende bringt. Nach Schegloff / Sacks kommt man mit den "pre-closing" Ausdrücken in die "closing section" hinein und schließt man die Konversation mit den Äußerungen, die "terminal exchange" genannt werden. Und in "closing section" werden manchmal einige Äußerungen, die nach Clark / French "leave taking" genannt werden, eingeschoben. Es gibt aber sehr viele Konversationen, den nicht nur "leave taking" sondern auch "terminal exchange" und / oder "pre-closing" fehlen. Hier wird die japanischen Konversationen von drei unterschiedlichen Beziehungen zwischen Gesprächsteilnehmern beobachtet. Und solche Äußerungen, die nach Schegloff / Sacks Schluß signalisieren, geben aber keinen entschiedenen Anlaß zum Schluß. Diese Äußerungen sind alle nur geäußert, um menschliche Beziehungen zwischen Gesprächsteilnehmern zu erhalten oder besser zu machen. Wenn man also kein Bedürfnis danach hat, kann man einfach sofort die Konversation schließen. Durch die Analyse von Konversationen von drei unterschiedlichen menschlichen Beziehungen soll hier gezeigt werden, daß man je mehr Bedürfnisse hat, desto wird man mehr Äußerungen mehr wiederholt benutzen.

## 0 はじめに

会話を終了させるということは、存外難しいことなのかもしれない。大学生のNさんは、友人からの電話が切れないことを半ば真剣に悩んでいる。タイミングがつかめないと言う。言うべきことがなくなれば終わっていいというのであれば、どれほど気楽か知れないと嘆く。

Schegloff / Sacks (1973) も会話終結のメカニズムを明らかにしようとしたとき、多くの人がNさん同様、会話を切り上げることはなかなか厄介な問題であると感じていることを認めていた。しかしそれは、目下の彼らの関心事とは基本的に異なると考えた(邦訳 p. 179 参照)。だからできあがった装置は、なるほど終結のある現実を写し出してはいたが、彼らのもくろみとは異なり、会話の参加者がその装置を利用しながら会話を秩序正しく終了へ持ち込む様を見て取ることはできな

かった。その後の研究によって、終結における最も中心的な問題は、まさにこの「厄介」な部分と関わっていることが明らかになってきた。Button (1991) の言葉を借りれば、「会話者間の永続的な関係維持」のために言語を操る難しさである。問題がそのようなものであれば、これはそれぞれの社会や文化によって、大いに異なることが考えられ、個別社会的な取り扱いが必要なものだと思われる。そのためには実際の談話観察が欠かせない。以下の考察は、日本社会における会話終結のメカニズムを明らかにするための、分析視点を導くことを目的としている。そのため談話数も限定されているが、ここから明らかになったことは、さらに多くの資料によって検証されなければならないものである。以下では、まず先行研究を概観し終結メカニズムの枠組みを設定する。そしてその後、対人関係の異なる3タイプの談話を取りあげ、その終結にいたる過程を比較し、それぞれの対人関係で利用される装置と

方略の関係を探る。

## 1 分析資料の概要

ここで分析される談話は、始めと終わりが比較的明確な自然談話あるいはそれに準じるもの32談話である。比較的明確というのは、電話によるものはベル音でマークされるが、対面のものでは言葉の最後が会話の最後と完全に重なると言えるかどうかためられるためである。自然談話あるいはそれに準じるものと言ったのは、録音を対話者自身に行ってもらったので、その影響を完全に排除できないだろうと考えるためである。後者についてはある程度やむを得ないが、前者に関しては電話のみの資料に限定すべきであったかもしれない。ただ対面の談話については対話者からその時の状況を聞き取り、考察にいかした。談話は大きく3つの対人関係に区別される。友人間のものが12談話、客と業者のもの10談話、そして親子や夫婦など家族間のものが10談話である。収録場所は愛媛県、広島県。収録時は1997年3月から8月までである。談話は数秒の短いものから9分という長いものまで様々であった。分析対象にしたのは、最初に登場した先終了句（以下で説明される）から談話が終わるまでの部分である。

## 2 先行研究

### 2-1 Schegloff / Sacks (1973) のモデル

Schegloff / Sacks (1973) が考える会話の終了とは、ある話し手の発話の完了が他の話し手の発話機会とはならず、しかもそれが沈黙と聞き取られないような地点に、会話者双方が到達することである。その地点は、最終交換と呼ばれる特別な隣接対によって実現される。特別というのは、この隣接対の後にはいかなる発話も引き起こされないこと（＝移行適切性の解除）が保証されているという意味である。byebye - byebye などの交換がその典型例であるが、最終交換というのは、この例のように常にそのためにのみ用いられる表現ばかりではない。thank you や see you など、多くは最終交換以外の用いられ方がある表現なので、それが最終交換になるためには、終了部門内で用いられていることが必要になるという。終了部門というのは、先終了句と呼ばれる交換によって導入される。先終了句とは、「もはやこれ以上言うことがない」ことを示すもの

で、2つのタイプが挙げられている。一つは”We-ell” “O.K.” “So-oo”などで、これのみで自らの発言権を行使してしまうものである。すなわち間接的に「もはやこれ以上言うことがない」ことを示すものと言っていいだろう。これに対して二つめは直接的な表現で、「長くなると悪いから」「電話代が高くつくといけなから」「ちょっと出かけるので」など、明示的に終わることをアナウンスするものである。

終了部門は、最も単純には先終了句と最終交換のみで構成されるが、多くの場合拡大されて、再会の手はずを整えたり、会話の初頭で行われた打ち合わせを再提起したり、会話を開始するために用いた理由を繰り返したりすることがあると言う。図式化すると、図1のようになる。

### Schegloff / Sacks のモデルにおける問題点

#### (1) 先終了句について：

2つのタイプの先終了句は、明らかに性格が異なる。タイプ1は確かに「もはやこれ以上言うことがない」ことを示している。タイプ2はそれを前提にした上での「終了への導入発言」である。この区別をしないと混乱が生じる。

日本語の先終了句を整理した岡本（1990）には、これらに加えてさらに会話内容のまとめや結論、またそれらから導き出される行動の確認なども含まれている。そこには「もはやこれ以上言うことがないことを示すもの」という基準があるようである。これらは確かにすべて、結果的にはそういうことを示すことにはなるが、そういうふうには言え、最終交換でさえ、そうである。以下の我々の議論では、先終了句という語はタイプ1に限定して用い、タイプ2は「終了理由」、岡本のは「会話のまとめ」として区別して扱う。このようにするもう一つの理由は、そうでないと先終了句が複数個あり、どの段階で終了部門へ入るのか決定できない談話があるためである。

#### (2) 終了部門内で同定される最終交換について：

Schegloff / Sacks の言う最終交換というのは、本当に最終の交換でなければならないだろう。それこそが、会話の続行を保証する移行適切性を解除するものであるからである。だから、最終交換以降に現れる発話は例外でなければならない。

それぞれの社会には別れの挨拶として固定した表現（例

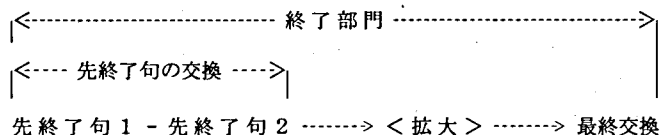


図1 Schegloff / Sacks のモデル < >内は任意

えば「さようなら」)があるが、これは明らかに最終交換である。だからこそ次の例は、言い忘れがあったという例外的な場面であることが我々には認められるのである。

M:へじゃね うんバイバイ あっ  
 A: うんじゃね はいバイバイ  
 M:お弁当すぐ食べるの冷蔵庫に入れるかしちよきなさ  
 M:いよ お天気がええからね、腐るといけん  
 A: あ分かった  
 M:から じゃあね はい気を  
 A: うんありがとう うんじゃあね  
 M:つけて はいバイバイ  
 A: はい バイバイ

ところが、Schegloff / Sacks の最終交換には、これとは別に終了部門という特別な部門にあって初めてそれと同定できる表現群がある。これは、例えば特別な場面(店屋など)で最終交換として「ありがとうございました」という表現が固定的に用いられることを考慮したということではない。O.K や see you をそれらに加えているからである。しかしこれらを認めると、実際の談話では複数個の最終交換が現れうる。これはすなわち最終交換があっても、会話は終わらないことを意味する。最終交換という概念の有効性が問われる。(補足:一等最後の交換を最終交換とするという解釈は、Schegloff / Sacks の考え方に反するだろう。それは分析者による事後的な解釈で、会話の参加者自身がそれらを手がかりにして会話展開を組織していくという視点が欠けるからである。)

### (3) 終了部門内の拡大について:

終了部門が拡大され、既に行われた打ち合わせなどが再提起されることについて、Schegloff / Sacks は、これはそれまでの話を蒸し返すためではなく、先終了句を引き出すためであると述べている(邦訳 p. 222)。先終了句によって導入された終了部門が、なぜ拡大によって再び先終了句を導入しなければならないのだろう。これは、この拡大部分を会話終結そのものと関係づけたために起こった不都合ではないだろうか。我々の議論では、これらは会話の最後に来るもう一つの話題と位置づける(以下の Clark / French (1981) 参照)。

## 2-2 Clark / French (1981) のモデル

Schegloff / Sacks は、基本的に「会話は終了に持ち込まれるものであり、単純には終結しない」という立場であった。しかし、ここで紹介する Clark / French (1981) は、会話自体は単純に終結するという立場である。会話の終了が複雑に見えるのは、対人関係を作ったり維持したりする行為が実行されるため、この行為に実現場所の制限(=会話の最後のトピックでなければならない)があることが原因しているという。彼らは、ある大学の情報案内センターにかかってくる電話の分析から、bye-bye などの最終交換の実現が、質問内容や相手にかけた負担と無関係ではないことを発見した。すなわち、最終交換のない終結があることに気がついたのである。そこで会話の終了自体は、先終了句の後に受話器をおくことで実現されると結論した。

彼らのモデルでは、終了部門は機能の異なる3つの下位部門からなっている。

1. トピック終了 (Topic termination): 先終了句とほぼ同じ(例 okay-okay)
2. いとまごい (Leave-taking): トピック終了後のやりとり。最終交換を含む。
3. 接触終了 (Contact termination): 電話をおく音によって実現。同時なので相互に聞くことはない。

最終交換は会話の終了ではなく、いとまごいの終了のために行われる。いとまごいには、先終了句以降のすべての発言が含まれることになる。いとまごいは人間関係の維持を目的とした部門なので、そのような配慮を必要としない相手にはこの部門の実行はない。即ちこの部門は実行任意である(図2参照)。

我々の分析枠はほぼこの、Clark / French のモデルに従う。すなわち、Schegloff / Sacks の終了部門での拡大部分と最終交換は、いとまごいを実現するための最後の話題と位置づける。しかしこのモデルでも、先に挙げた先終了句と最終交換の問題は残る。これらが会話者にとって新たな局面への導入(終了部門への導入、移行適切性の解除導入)シグナルである限り、

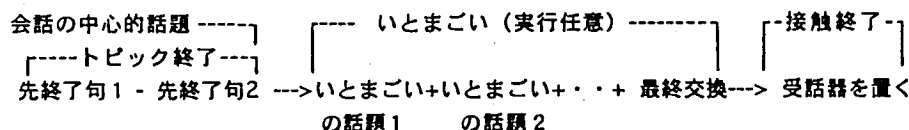


図2. Clark / French のモデル

明確にそれと同定できる必要があると思われるが、現段階ではそれができない。以下の議論ではこれらの概念の有効性を問うことになるので、これらの語は用いない。但し先終了句に関しては2で述べた意味に限定して用いる。

分析に入る前に、「いとまごい」についてもう少し考えておこう。この部分は人間関係の成立、あるいはその維持を目的とした行為と位置づけられている。こういう目的のためになしうことは数多くあろう。例えば、相手をほめてもいい。相手の得意なことを話題にしてもいい。しかし、そのような話題がいとまごいに登場することは少ない。後に見るように話題は限られている。そしてそれらはあるテーマに収斂していくように思われる。どのようなテーマかとなると、そのヒントになるのが、Button (1991) である。Button は、会話には、先終了句の導入後まっすぐそのまま終結連鎖にはいるものと、再会の約束という特別なトピックが導入されるものがあると言う。再会の約束 (Arrangement : 必ずしも実行可能である必要はない) は、Button によれば、当該の会話が過去に交わされた会話や将来交わされるであろう会話群の中の一つ (Conversation-in-a-Series) と位置づけられる際に実現される。すなわち、ある種の会話は決してそれ自体で独立し完結するものではなく、連続していく、あるいは連続していくことが前提とされている。再会の約束は次の会話実現への橋渡しであり、それはすなわち対話者間の永続的な社会的関係を組織することであると言う。ここでは、人間関係の成立、維持という目的と、再会を約束するという行為が結びつけられている。再会というのはこの次の接触である。Button は、「じゃまたね」という再会の約束表現タイプのみを取りあげているが、会話の終了時に人間関係の成立維持を目的として行われるいとまごいは、以下実際の談話で見ると、どんな表現も結局接触ということに収斂していくのではないだろうか。人間関係を組織するという目的には多くの方策があると思われるが、会話の終了時にはそれに適した固有の方策があると思われる。それが接触確保ということである。では、実際の談話を見ていこう。

### 3 談話分析

#### 3-1 終了に際して出現した表現

我々の資料では、先終了句以降に現れた表現は以下のものであった。

(1) 先終了句 (もはや言うことがないということを表す) 例:

M: よいお友達ができてえかったね

K: うんうん

#### (2) 終了理由

例: ちょっと私図書館行って来るから

じゃ早く休んで

#### (3) 会話のまとめ

例: ほしたら、それであの見積もりして持っていきますから

じゃ6月の最後の土曜日ね

#### (4) 互いの幸せや健康の祈願

例: 気をつけて行きなさいよ  
がんばってください

#### (5) 家族について言及

例: C君ごめんねってゆつといてね  
たまにはお母さんやりかさんにKDDでお電話してあげて下さい  
Yさんによろしくお伝えください

#### (6) 感謝謝罪

例: ありがとう  
どうも申しわけございません  
ごめんね

#### (7) よろしく

例: よろしくお願いします

#### (8) 再会の約束

例: じゃまた  
じゃ待つとる  
また連絡します

#### (9) 別れの挨拶

例: ばいばい  
失礼いたします  
お休み

限られた談話数にも関わらず、岡本 (1990) に挙げられた表現分類のほぼすべてが網羅されたのは、彼らが終了部分を構成するものとしてほぼ定式化されていることを物語っている (分類は筆者自身による)。以下では、まず終了導入のきっかけとなる先終了句について考察し、次に(2)以下の表現群を取りあげる。

#### 3-2 日本語の先終了句

上の分類のうち、Schegloff / Sacks が先終了句としたのは(1)と(2)である。岡本は(2)と(3)を考えていた。筆者は(1)のみを先終了句とする。その最も大きな理由は、以下の例に見るように、談話によっては(1)(2)(3)の表現が同時に現れるものがあり、すべてを先終了句とする、終了部門へ入るきっかけがどれであるか決定でき

ないからである。

1) 先終了句(1)のみにより終了部門が導入された例  
K: B子ちゃんがよろしくって言ってたよ  
M: あほんと うん分かった  
K: うんうん うん  
M: よいお友達ができてえかったね うん  
K: うん  
M: まあへたら気をつけて 行きなさいよ

2) 先終了句(1)と終了理由(2)から終了部門が導入された例  
Y: Pとかどうかね ああ  
S: いや大丈夫やと思うけど おお  
S: ちょっと俺これからあのう床屋行って来るけん

3) 先終了句(1)と会話のまとめ(3)から終了部門が導入された例  
J: あのですね、ちょっと明日の朝じゃないと、ちょっと  
J: と分からないんですよ はい  
R: あ、そうですか はい  
J: はい、明日になり次第連絡入れます  
R: ほんなら明日

これらの例を見ると、多くは先終了句が終了への導入になっている。互いにもはや言うべきことがないことを確認しあうことは、会話終結にとって重要なことなのであろう。しかし、次の例に見るように先終了句のない終了もある。だからと言って、Schegloff / Sacksが言うように、無愛想や不機嫌などと解釈されてはいいない。

P: ちょ今度釣りに行こうや釣り  
Q: え、まあ来週も忙し  
P: そうか んあ?  
Q: いですからね M先生の発表とか M先生の  
P: あーあれはやらんといかんね ちょっと私図  
Q: 発表  
P: 書館行って来るから  
Q: あはい

また、先終了句というのは本来隣接対を形成するものであるとされているが、一方だけの、不完全な形のものも我々の例にはあった。

I: 電話しといてくれん? せんでも  
R: そう、いや、ああそう?  
I: ええんやったらええけど  
R: ほんならまあ言うとかわ

I: うん 今から帰る じゃね  
R: まあもう帰れるんか? うん、じゃ

これらを考え合わせると、先終了句が会話終結に不可欠であるというのは正しくないのではないか。相互に「もう言うべきことがない」ことを確認して終了へ入るというのは、最も基本的なことではあろうが、しかしマナーに属する行為ではないだろうか。そう思っていると、先終了句が何度も登場する談話もある。相手への配慮が普通以上に大きいのだろう。

B: ご主人はお元気? 元気? (笑)  
C: あ、元気よ うん、相変わらず  
B: ああほんま  
C: まあね、こんな調子じゃろ うん、時々喧嘩  
B: それが一番順調ってことじゃないでしょうか  
C: もしながら (笑)  
B: うーん そうだな そうだな  
C: ああそう そっかー うーん  
B: ふーん 楽しみにしとろう  
C: うーん

このように考えてくると、先終了句が終了部門を導入するという言い方は正確ではないことになる。先終了句は終了への移行の準備ができたことを示すものではあるが、それを示すこと自体は相手に配慮する行為であり、そのような配慮が要らない場合は、言いたいこと聞きたいことがなくなればただちに受話器を置くことができる(Clark / Frenchによる)ということになる。先終了句が、他のいとまごいのための表現と同じく、対人関係を配慮したときの方策の一つとなれば、会話の終了時に登場するすべての表現は、会話終結そのものの問題ではないことになる。先終了句については後にもう一度ふれる。

### 3-3 いとまごいのための表現

次に先の分類の(2)から(9)の表現群について見ていこう。Buttonは、再会の約束(8)、すなわち次回の接触を合意することを特に取りあげ、それを「対話者間の永続的な社会的関係を組織する」方策と考えた。しかし、以下で示すように、これ以外の表現もすべて接触に関わるものであると言える。これらの表現は現在の接触、次回の接触、そしてその間の気持ちの上での接触を表し、まさに永続的な接触を実現していると思われる。

#### 3-3-1 感謝謝罪(6)と再会の約束(8)について

最も明示的なのは、感謝謝罪と再会の約束である。前者は現在の接触への言及であり、後者は次の接触へ

### 3-1-3 相手の幸福や健康の祈願(4)について

相手の幸福健康祈願の典型例は「気をつけて」「頑張っ

次の節では、対人関係や場面の違いによって確かにそのような傾向があることを示したいと思う。

4 会話終結

我々の談話資料は、対話者間の関係として、友人間、客と業者、家族間という3グループのものが区別されている。表1は、各談話に現れたいとまごいの表現回数を談話別に表したものである。

表1 談話別に見た先終了句といとまごい表現の出現回数

		(1) 先終了句	(2) 終了理由	(3) まとめ	(4) 健康祈願	(5) 家族言及	(6) 感謝謝罪	(7) よろしく	(8) 再開	(9) 挨拶	いとまご い合計
友人関係	(1)		1	1			1			2	5
	(2)								2	2	4
	(3)	2					4		1	2	7
	(4)		2						1		3
	(5)	2	1						2		3
	(6)								1	1	2
	(7)	2							2	4	6
	(8)	5		1		2		1	4	2	10
	(9)	2					1		2	2	5
	(10)	2		2			2		1		5
	(11)			1		2	11				14
	(12)	26		4		1	2	1	5	2	15
合計	41	4	9	0	5	21	2	21	17	79	
客と業者関係	(1)	2					1	1			2
	(2)				1	2	1				4
	(3)	3		1			1	1			3
	(4)	1		1				1		1	3
	(5)	2					1	2			3
	(6)	4				1	4	3			8
	(7)	3		1			2	1		1	5
	(8)	4					1	1		1	3
	(9)	2		2				1			3
	(10)	2		1				1			2
	合計	23	0	6	1	3	11	12	0	3	36
家族関係	(1)	4			5		1			4	10
	(2)	2		2							2
	(3)	3					1				1
	(4)	2									0
	(5)	1									0
	(6)										0
	(7)	3					2				2
	(8)	1									0
	(9)										0
	(10)	2					1				1
	合計	18	0	2	5	0	5	0	0	4	16

対話者間の関係によって、いとまごいの表現の総数に大きな違いがあるのが分かるだろう（表中の右端欄参照）。個人的なつきあいが大事になる友人間では、仕事の関係だけの客と業者に比べ、倍の手数が踏まれている。さらに家族間では表現数は極端に少なく、永続的に保証された間柄ではその必要がないのだろう。また友人同士でも、日常的に顔を合わせる間柄と遠くに住み稀にしか会えない友人（友人関係(12)参照）では違うし、また客と業者の談話では、トラブルが生じ関係が危うくなっているもの（客と業者(3)(4)(5)参照）とスムーズに事がはこんでいるもの（客と業者(6)参照）とでは方略数に違いが出ている。いとまごいに用いられる表現数は、相互関係の維持や修復の必要性に比例するようである。

ところで会話の展開を追うと、これらの表現間には一定の出現順序があるように見受けられる。個人別に見た時の隣接表現2者間の前後関係は表2のようにまとめられた。

表2 隣接表現2者間の先行後続関係

後続	先終了	理由	まとめ	祈願	家族	感謝	よろしく	再会	挨拶
先終了	11		3	1	1	1	1	3	
理由	1								
まとめ	9		1			2			
祈願	2			1		1			
家族	1					1			
感謝	12	1	4	2	1	11	2	1	
よろしく	7		2			5			
再会	6	2	2			2	1	1	
挨拶	4		1	2		5		10	

各表現2者間の先行後続関係を比較すると、いずれも網掛け部分から左下の数の方が右上の数より大きくなっている。限られた談話数であるから、今後の調査により修正される可能性を含むが、表中の左（あるいは上）の表現から右（あるいは下）の表現へ流れる順序を仮順序としよう。各表現がいとまごいの中で何を焦点化した表現であったかを思い出してみると、面白い順序になっている（図3参照）。ちょうど入れ子の様になっているが、いとまごいが簡潔に行きすぎない工夫であるかに見える。先に各表現を分類した際、「会話のまとめ」には「次の接触」かと思えるものがあ

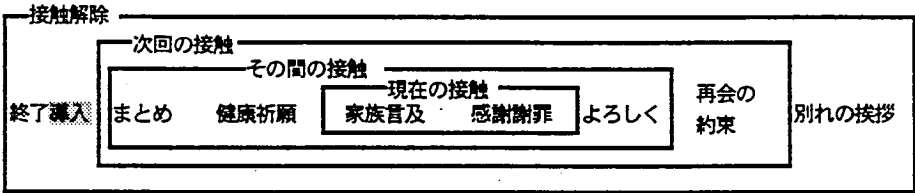


図3 表現間の仮出現順序

ることを指摘したが、この図を見るとそれも無理なく収まる。

ただこの順序をあまり厳密に考えるのは正しくないだろう。むしろこの図が示すことは、いとまごいを構成する4つの方略（接触解除、次回の接触、その間の接触、現在の接触への言及をさす）が時を改めて何度も利用できるようになってきているということである。我々の資料では、多くは後半の表現に偏っていた。すなわち、利用は1度のものが多かったが、次のような例を見ると、何度も利用しながらいとまごいを丁寧に遂行する様が見て取れる（Mの発言のみで示す）。

（現）＝現在の接触  
（間）＝その間の接触  
（次）＝次回の接触  
（解）＝接触解除

M: お体だけあのお気をつけて下さいねえ。(間)  
R: ありがとうございます。  
M: はい、またあの上かったら、あの落ちつきましたらおてがみください。(次)  
R: ええそうです。  
M: ま、お気をつけて//先生本当に。(間)  
R: ええ、ありがとうございます。  
M: ちらっと//聞いたもんですから  
R: わざわざごて え  
M: ちらっと聞いたもんですからね  
R: ええ  
M: いや本当かしらと思ひましてね  
R: ええ  
M: もうお電話したんですよ。(現)  
R: ああそうですか、まあどうもすみません、ありがとうございました。  
M: お気をつけて (間)  
R: ええ  
M: はい//本当またあのお役に立つことありましたら  
R: ありがとうございます。  
M: ほんと何でもおっしゃってくださいませ。(間)  
R: ええ、また何か  
M: はい  
R: ご迷惑かけるかもしれませんが  
M: はい  
R: どうぞよろしくお願いいたします。  
M: いいえどうもほんとですいません。(現) ほんと//お気をつけて行ってらっしゃいませ。(間)  
R: どうもありがとうございました  
M: はい//どうも( )します。(解)  
R: 失礼いたします。

## 5 先終了句再び

対人関係のより丁寧な組織化は、より多くの表現を重ねることで実現されることを見てきた。同様のことが先終了句についても言えないだろうか。これまでの研究では、先終了句は終了部門導入のシグナルであると言われるだけで、その個数について問題にされることはなかった。しかし我々の資料では、対人関係の違いによって大きく異なっている(表3参照: 本来隣接対と考えられているが、片方だけのものもあるので、1ペアは2つと数えた)。先終了句は表現形式としては相づちに属するものが多く、それ自体は意味を持たず、機能としては「もはや言うべきことがない」ことを示すものであるが、そのような語の度重なる使用とは、自らは談話展開の主導を取らずに、相手に取らせるための方略であろう。我々の社会では「主導しない」ことは相手をたてるための一つの方略である(Ohama/Marui 参照)。客と業者の一時的な関係とは違い、長期にわたる友人関係ではそんな配慮が必要なのだろう。

表3 対話者関係別に見た先終了句の出現数

	先終了句の数
友人関係	41
客と業者	23
家族関係	18

## 6 最後に「じゃ」について

日本語では会話の終了に「じゃ」がよく用いられることが観察されている。我々の資料にも52個の「じゃ」（へたら、ほんなら、それじゃを含む）が見られた。熊取谷(1992)はこれを「移行標識」と呼び、先終了句や最終交換への移行を表示するものと位置づけている。「じゃ」がこのようにある表現形式に先行する形で固定し、それが慣用的になれば、例えば最終交換なしに「じゃ」のみで会話が終了されることも珍しくないと言う。しかし、「じゃ」もまた対人関係の違いによって用いられる頻度に大きな違いが見られた(表4参照)。

表4 対話者関係別に見た「じゃ」の出現数

	「じゃ」の数
友人関係	30
客と業者	4
家族関係	18

ここでは、会話相手を知っているか、知らないかが差をつくっていると思われる。「じゃ」は移行標識には違いないが、それよりはむしろ移行の告知、すなわち談話展開への主導の表現ではないだろうか。主導を取することは相手に対して優位に立つことになるが、よく知っ



た間柄では危険はない。しかも、実際の談話を見ると「じゃ」には相手からの応答（うん、はい、おお）を伴うことが多く、より実的な命名にするなら「移行の催促」と言うべきかもしれない。

の時点を判断するきっかけがあるのか、それとも適当にやってみるだけで、常に「厄介なことがら」であり続けるのか、ここで結論づけることはできない。この次の課題である。

	客と業者	友人間	家族間
いとまごい行為の方略			
主導することによる方略（「じゃ」）			
主導しないことによる方略（先終了句）			

図4 対話者関係と用いられた方略

7 まとめ

以上見てきたことをまとめると、「対話者間の永続的な社会的関係を組織する」ことは、単にいとまごい表現だけではなく、先終了句や移行標識の「じゃ」によっても行われる。ただこれらの手段は方略的に異なり、いとまごい表現は接触そのものを焦点化することで、直接的に、そして先終了句や「じゃ」は談話展開の主導を調節することで間接的に組織化を図る。それぞれの方略が多く現れた対人関係（網掛け部分）とあまり見られなかった対人関係（白抜き部分）を比較する（図4参照）と、これらの方略の守備範囲が見えてくる。

いとまごいの方略は安定的な関係（家族間）ではなく、不安定な関係で多く用いられる。新たに関係を作ったり維持したりするための方略と言える。主導をするという方略はよく知った間柄で用いられる。すなわち親しさを表すことで関係維持を図る方略である。自らは主導せず相手に主導させるという方略は、客と業者のような一時的な関係ではなく、友人間のような個別的永続的な関係を求める方略であると言える。これをみると、客と業者や家族間の組織化は比較的単純であることが分かる。それに比べ、友人間の組織化は複雑である。特に主導に関しては、「する」方略と「しない」方略が同時に用いられ、駆け引きの難しさを予想させる。冒頭のNさんの訴えは、まさにこれに関係があろう。しかし、とにかく複雑さに違いはあるが、どの対人関係でも、それなりに関係性の組織化が図られているのである。

ところでこれまでの考察から、これら3つの方略は目的遂行のために一度しか使えないものではなく、何度も使えるものであった。使えば使うほど丁寧な組織化になる中で、会話の参加者は会話を終了させるためには、どこかでその使用をやめなければならない。そ

参考文献

Button, Graham(1991) “Conversation - in - a - Series” In: D.Boden / D.H.Zimmerman (eds.) Talk and Social Structure. Polity Press. 251-277.

Clark,Herbert H. / Wade, French(1981) “Telephone goodbyes” Language in Society, Vol. 10, No. 1, 1-20.

熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』Vol.11 9月号,14-25.

Ohama,Ruiko / Marui,Ichiro(1983) “Japanische Interaktionsstrategien. - Datensammlung zu einem Programm kontrastiver Untersuchung Japanisch - Deutsch -” : 言語文化研究 (松山大学) 第3巻1/2号 35-133.

岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72号 145-159.

Schegloff, Emanuel / Harvey, Sacks(1973) “Opening up Closings” Semiotica, Vol. 8, 289-382. 北沢裕/西阪仰訳 (1989)『日常性の解剖学』マルジュ社 177-241.

鈴木孝夫(1968)「あいさつ論」『言語生活』196号,19-30.

田中望(1982)「別れ」の言語行動様式」『言語生活』363号,38-46.